

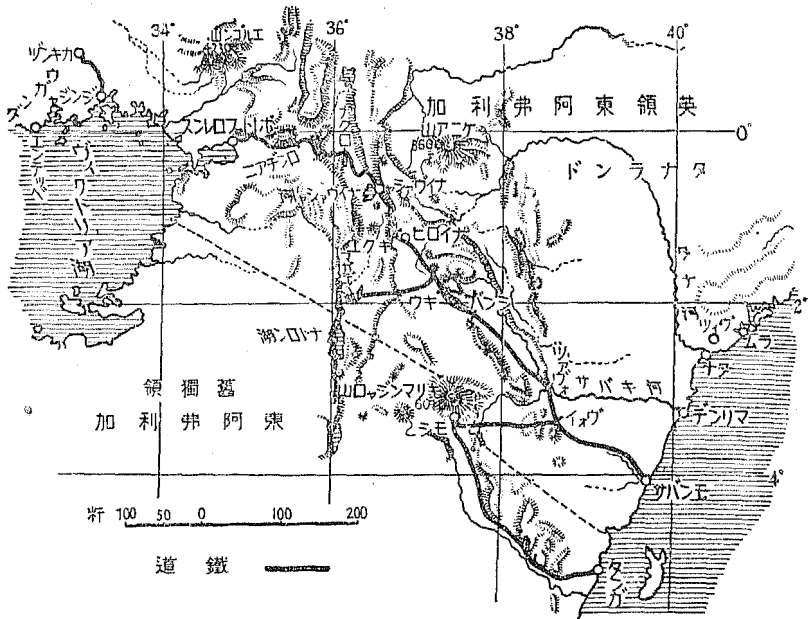
英領東阿弗利加の開發

藤田元春

一

英領東阿弗利加は阿弗利加大陸の東岸赤道直下に位し、東は印度洋から西はコンゴ自由國に跨り、南は舊獨逸領東阿弗利加で北はアビシニアに接してゐる。海岸には珊瑚礁から成立した多數の島嶼があり其一つにモンバサ島 *Mombasa* がある、其石灰岩上の沖積平野にモンバサ市がある。大陸の沿岸平地は幅員極めて狭いけれどもサブキ *Sabaki* タナ *Tana* と稱する二大河が國內を貫流するので其沿岸はかなり廣い、内地の高臺は波狀地をなし不毛の野原である。雨がなからアカシア屬の灌木が生じてゐるに過ぎない、草もない。然し國の西部に進むと所謂ケニア火山帯となるから地質も火山岩の土壤にかはり雨量もやゝ増加して草原と云ふ風景に

なる。この火山帯の西側は有名なエリトリアン地溝帯で、多數の内陸湖や河水が南北線上に配列し北は紅海に南はザムベジ川 *Zambezi* に達する一大地溝を示めす所でケニア以下の火山もこの裂罅線に沿ふて噴出してゐるのである。この地溝の西側壁を越えると地面は再び西に傾きてグイクトリアニアンザ湖 *L. Victoria* の盆地になる。草原より内部は、古來暗黒大陸と云はれたところで最近の探險時代までは全く不明の地であつたが、海岸平地や島嶼にバンツール *Bantu* 族が居住することは餘程古くから知れてゐたもので、アラビア人や印度人のこの方面に通商するものが、夙にこの海岸の各所に各其根據地を作つてゐたものである。然るに葡萄牙が東方航路を發見するや、葡萄牙人の手は直ちにこの



方面に延びモンバサを始めマリンジ Malindi ラム Lamu 等の各地に根據を作り彼の印度航路を保全する事になつた。ついで葡萄牙の印度に於ける勢力の失墜するに至つてこの地方の有用の度が減ると共に葡人の活動も下火になつたからモザンビーク Mozambique よりも北方にあつた海岸の葡領は何れも再びアラビア人の手に復歸した。ついで一八二四年頃になると英人の勢力が大きくなりモンバサを英國に併合するといふ條約を結ぶまでになつたが時の英國議會は之を承認せず一八七九年にはザンジバル Zanzibar のサルタンが英國に保護をたのんだけれどもこれも許されぬといふ調子であつた。然るに一八八四年に獨逸がザンジバルの對岸に其足溜りを作くり一八八五年にはタナ河の沖積地に近いキツ Witu を保護せんとするに至るや、英國は決然立つて之に對抗し直ちにモンバサを占領し其對岸地をザンジバル王から奪ひ其支配を英領東アフリカ會社に委託した、それは今から三十五年前一八八八年の事である。そこで會社は多く

の探險者を派出し内地に足溜をつくり進んでウガンダ Uganda を占領した。しかしこの會社は收支相償はず費用外になつたので一八九五年に其支配權を英國皇帝に返納した。以來英國外務省の支配する所となり一九〇五年以後植民省の管理に移つた二十世紀の初めには其貿易額も少く一九〇一年から二年の間に輸出は僅に四十二萬一千磅に過ぎなかつたのである。

二

この地方は今二の部分にわかれ東はケニアコロニーと云ひシユバランド、北境地方、タナランド、ケンヤ、ウカンバ、セイデイ、ナイバシヤ、ニヤンザの八縣に分れてゐるがシユバランドの東境は明でない。今一つはウガンダで其中にウガンダ本部及附近のウニヨロ、ウソガ、カピロンド、コキ、アンコール等の地方を包含してゐる。この地方は過去二十年間に人口が非常に減少し今日居住する土人の數は三十萬内外である。健康地ではないが北はナイルの河谷に通じ南は舊獨逸領東阿弗利加(タンガニイカ州)に

連りアフリカ縦貫線の要衝である。土人は黑人バンツ族で東北からワフマ族が來て混血した爲めに智識の程度も進み比較的高等な居住をしてゐる。そこへ一八六二年スピーク Speke のグラント Grant の探險があり一八六四年にベーカー Baker 來り一八七五年に有名なスタンレー Stanley が來るといつた處で、一八八八年になつて始めて英領東アフリカ會社の手に入つたのであるが最初一八九二年迄の間に土人を征服するに手間取つた處であつた。一九〇二年に至りモンバサからビクトリア湖への鐵道が貫通したがこの一線が實に暗黒大陸に起死回生の刺戟を興ふる一大動脈となつたものであつて、それ迄はモンバサから湖岸迄一噸の荷物を隊商に托すると三百磅と云ふ大金をかねばならなかつた所である。従つて探險費なども非常に高價となり内地の開發など夢にも語り能はぬのであつたが爾來僅に二十年象や獅子や麒麟や斑馬や大羚羊の徘徊するこの熱帯の草原や晝猶暗い原始林の中に蠻族が出沒するといふこの阿弗利加の高臺が

一朝にして文明人を歡迎し其の活動を期待するに至つたのである。蓋し近世文明の勝利がいかに力強いものであるかと云ふ事を語るに足るものである。

三

今ウガンダ鐵道の梗概を一九一四年刊行の「南東アフリカ案内」によつて記載してみる。

この鐵道は印度洋岸モンバサからヰイクトリア湖畔のポートフロレンス Pt. Florence に達する幹線で延長五八四哩、軌道の幅は「メートル、ゲージ」で狹軌である。機關は石炭の代りに木材を燃焼するがそれでも最大二十五哩の速力である。この兩端直通汽車で四十八時間を要する。ポートフロレンスにつくところからヰイクトリア周航定期船がでる。もしこの船にのれば湖岸の英領ウガンダ及びタンガニイカ、テリトリの要港を全部一順して十日の日子を要する。乾季に旅行すると汽車中にまで塵埃がたつから「イ、チヨール」の如き防腐劑を五%に溶した冷水を所持して居て一日に二回、目や鼻を洗はねば

英領東阿弗利加の開発

ならぬ。もし驛から外に出て宿るとなれば回歸熱を始め多くの熱帯病又は虫害に罹らぬ注意があるのは當然である。炎威燒くが如き阿弗利加高臺を駛走して得る所の旅行の樂は何であるか乞ふ予をしてこの沿線の都會について其の狀況を述べしめよ。蓋し四方の志ある人にとつてはこの鐵道程冒險的興味を惹くものは稀であらうと思ふ、何となれば熱帯の猛狩獸の本場として尤も容易に近寄れる處であるからである。

モンバサ港 南緯四度三分東徑三十九度四十分英領東阿弗利加の第一要港である。人口二萬六千に達し其中に白人は三百五十人居ると云はれる史蹟として千五百九十三年葡人建築の天主堂がある。一六三一年サルタン、モンバサが葡人を掠殺して獨立した事があつたが四年後再び葡人に回復せられ一六九六年にはアラビア人の包圍攻撃十數ヶ月に及び、葡人全滅の厄に逢つたこともある。英領になつてから市街も面目も一新したがこゝでは飲料水を得ること甚だ困難で天水を貯へて飲むところであつたが今日で

は遠く内陸のシンバ山から上水を取つてゐる。暑氣は強いが海濱だから堪へられぬことはない。こゝから僅に十六哩で海岸五百三十呎のマゼラ驛につく一千呎以下を沿海平野とすれば丁度その中心で甘蔗やコ、アを産するが氣候は宜敷ない。こゝから二十五哩ほど進むとはや阿弗利加高臺の一角にかゝり海拔一千呎に近く雨の降らない原野に入る。ゾ、オイ驛で一千百八十呎サイザル麻の耕作地になる。キリマヌジャロ山へ登山する人はこのゾ、オイ驛から支線に乗りかへて百哩、モシ驛に行く。

本線はこゝからツアゾ、I SAVO 驛海拔一千五百三十呎の地に上る、少しく雨量があるので土地の様子はかはつて草地になる。もとは兇猛なマサイ土人の住地であつたがこの方は今は歸順してゐるがそれよりも恐ろしいのは獅子が咆哮する地域であるので、汽車附設當時は何回となくこの獅子群に襲はれたものである。ツアゾからさき列車からは窓外時に麒麟を見ることが出来、海拔三三五〇呎のシンバ驛までくると獅

子の最も多く棲む地になる。

モンバサから二六七哩海拔四千八百六十呎のキウ驛までくると氣候は高原性になる、汽車は火山地帯に入つたので北方にケニアの雄峯を仰水を飲む大羚羊



ぎ南方にキリマヌジャロの雪冠を見風物非凡であるが窓外獸群の逍遙を眺むるによい、大羚羊、トムソンス羚羊、グラント羚羊、斑馬、駝鳥、禿鷹などの外に時にはバツファローや犀も顔を出し偶には獅子が飛んでゐる。ウル驛までくる

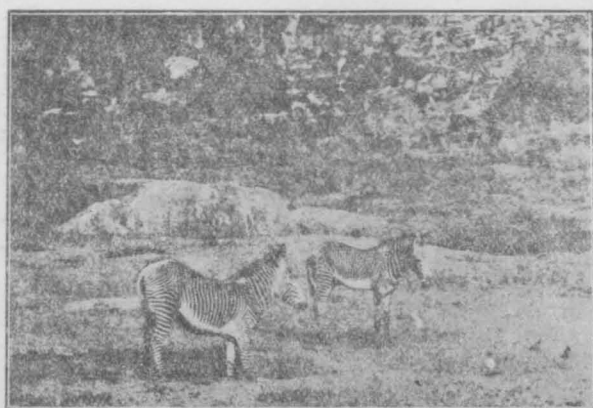
と海拔五千二百五十呎で氣候漸く溫和になり雨量も三呎七吋あるから杏や林檎や桃がとれる。この邊に亞麻栽培の見込がある、キウ驛から一五哩程の所にマガデイジャンクシヨンがある、マガデイ湖 Magadi と稱する曹達湖水がある其湖水への支線が出る、日本人で西川工學博士と渡邊久吉理學士はこの曹達地方に入られた最初の人である。支線の長さ九十哩。

さてこの分岐點から約五十哩モンバサから三百二十七哩海拔五千四百五十呎の高原にナイロビ市がある Nairobi. この市は英領の中央首府で政廳の所在地でありこの鐵道會社の本部があり無線電信局もあれば自働車や人力車の便もある人口一萬九千の中白人千二百、印度人五千と稱せらるゝ所であらゆる植民事業の策源地であるが同時に猛獸狩の一隊がこゝに來つて然る後其一般方策を建てる所である。この市からケニア山麓に互る間の草原こそ實に天下稀に見る野獸の樂園である。しかし象や犀や獅子を狩るのがこの鐵道經營の目的でない、今日は左様な冒險

者の爲めをはかるのでなくて、堅實な農民を移住せしめんとしてゐるのであるがナイロビに近いキクユ高原は其目的に叶つた珈琲栽培地で最近の發展目醒ましいものがある、これは後章別にのべる。珈琲のみでなくて甘藷、玉蜀黍、ミレー、豆、蓖麻子油等の産がある。

ナイロビから暫らくはエリトリア地溝の東側を上るのであるから汽車も中々困難になるが海拔七千三百四十呎のラメル附近にくると草地は一變して熱帶の密林になる。この邊一帶の森林は實にこの鐵道の動力源で燃料に供せられる。最高七千三百九十呎のエスカイプメントがその中心驛である。この驛を出るとあまり遠く行かぬ中に汽車はエリトリアン地溝の東側壁を下ることになる。線路の左が陥没し對岸の側壁との間四十哩乃至六十哩であるが凡千四百五尺程下つてゐる。各種の熱帶林に蔽はれ休火口のス、ワ山などが其間に屹立してゐるかと思へば風光明媚の小湖水が開展し土人の住宅なども所々に見えていかにも眺望に富んでくる。最高點から

キ、ヤ、ベ、驛まで下ると高度六七九〇尺になるがこゝに歐人の作くつたゴルフ場やテニスコートがあつて其處を得た趣である。しかしこのゴルフ場附近から又少し進むと森林帯は無くなり草原にかはつてナイバシヤ Nais 湖畔の野獸徘徊地になる。この湖水には河馬も棲んでゐる其西岸の湿地は野



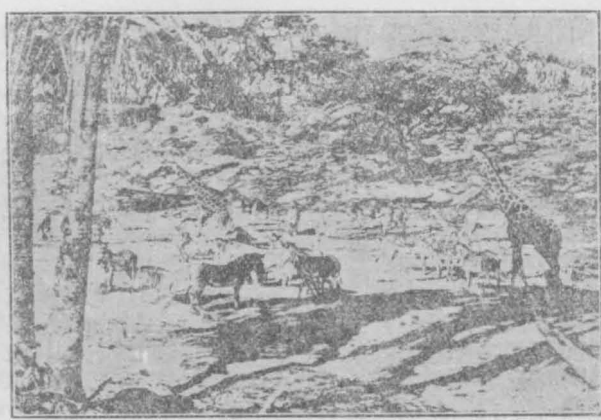
草原の斑馬

禽の好獵地である。この湖畔からケニヤ山への支線が出る。それから汽車は北進し五十八哩でナクロ Nakuro 湖に達する。この湖水は鹹湖で

五九五〇尺の高度にある。こゝも亦野獸狩の策源地である。汽車は大抵この同名驛で終夜休止して旅客に安眠の時間を與へる。

ついでこの驛を出ると再び西側壁を上ることとなり麥作に適する草原を過ぎて後再び森林帯に入る今度の側壁は斷崖も多く浸蝕も急峻であるから軌道は極めて困難な山腹を通つて千辛萬苦の跡を偲ばしめこの鐵道を計畫したサー、ホワイト、ハウス氏に感謝せざるを得ざらしめる。最高七千九百四十呎のモロ驛に達すると汽車は西側壁の西斜面を下ることになり、愈ピクトリア湖畔へ向ふのである途中のロンデアニ驛からウアシングツシユへの支線がでる。このウアシングツシユは赤道の北にある草地の高臺で農業開墾の最良候補地である。ルムバの隧道を通過すると間もなく高原を過ぎピクトリア湖畔の沖積地に出る。兇暴なナンデイ族が住んでゐて當初の植民を妨害した處であるがキボス Kibos に達すると愈々平坦な農業地の開展せるのに驚く。ヘンブ、木棉、ゴム、棗、胡麻等の栽

培地であるが土人をカピロント族と云ふ、裸體の民で密集村落をつくりよく働く。それから愈々終端ポートフロレンスにつく湖畔第一の要港で

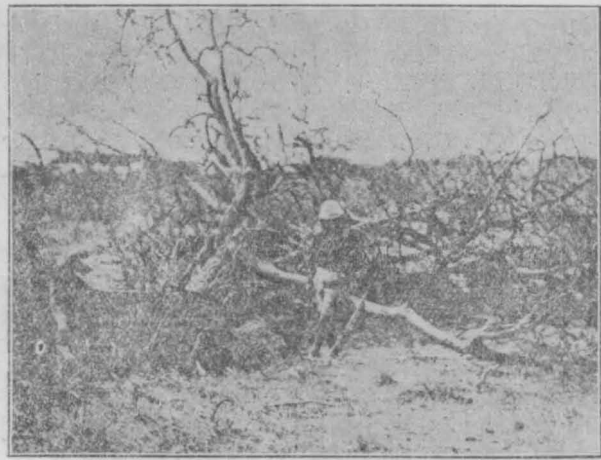


徘徊せし野獸

こゝからウ
ガンダの首
府エンテ
ツツ Enteb
ラへ汽船の
便がある。
以上の記
事によつて
この沿線が
いかゞであ
るかゞ大體
明になり得
たと思ふが
一九一三年

にバーネス及ケアトン二氏が中央アフリカを横断してこの途を取りコンゴ川を西へ下つたことがある。其目的は主として紐育博物館のため

に猛獸其他の自然状態の寫眞を採集するにあつた、其紀行が一九一五年に刊行されてゐる、其中にナイロビに着き、それからケニア山麓へ百哩



象の掘り返した大木

ばかり
遠征し
てこの
荒漠た
るサバ
ンナに
徘徊跳
梁せる
獸群の
状を撮
影した
ものが
出てゐ
る、誠

に面白いから其の二三をとつてこの記事に挿入したのであるが斑馬や羚羊の獸群や象の掘り返した大木の根や、麒麟や秃鷹の状態が極めて面

白く出てゐる。蓋しかゝる熱帶動物の自然状態は今は鐵道沿線には見られなくなつてゐるらしい。案内記には窓から見られるとあるけれどもパーネス氏の記す所によればナイロビ附近の如き今見えるこの羚羊や斑馬は數年ならずして影を没するであらう、しかして一帯に耕地に化するであらうと述べてある。

四

以上の記事や報告を見ると英領東阿弗利加は一言にして猛獸狩の樂園ではあるが、炎熱瘴癘の地で、黒人が原始状態で住む外に文明人が到底居住する所でないと思はしめるに足るのであるが、最近ポートサイド帝國領事黒木氏の報告を讀むに及んで、ケニヤ及ウガンダは英領阿弗利加中將來最も有望な所となつてきた、今黒木氏の報告に基いて其開發の状況を概説する。總督チャールスエリオット卿が東部阿弗利加の管理に當るやこの鐵道の通過する高原の開發に意を用ひナイロビの西北及北方に位するキクユ高原の下部斜面六四〇英町の畑地を、一英町僅に二留

比にて分與し二百名の珈琲栽培者を招いた等の事をやつたものである、同時に資本を有せる少數者にも輕易な條件を以て宏大な土地の貸下げをするといふやうな方法をも併用したがキクユの農圃は其後大に發展し嘗て二留比にて渡した同一地が一英町二十五磅にて賣却されるやうになつた。

當時モンバサ及ナイロビ兩都會の歐洲人は官吏宣教師商人を一括して百人以下であつた、而も歐洲婦人に至つては其數最少く全國を通じて五十名内外であつた大抵の新來移民は困難なる生活を餘儀なくしてゐたのであつたが後から後からどやつてくる移民に對し開拓地を是等新來者に賣却し舊開拓者は新に土地を求め賣却收入金を以て之が開拓をするといふ風であつた。従つてナイロビの北方に金剛石がでると誤認せられた時の如き多數の移民が殺到するといふやうなこともあつたが、歐洲戰前に於て珈琲栽培、シザル麻栽培其他の植物の栽培が有利に行はるゝに至つて鐵道沿線の開發日を追ふて進歩してき

た。戦後に歐洲移民の流入も夥しくなつたが廣漠たる原始高原は猶多數の勞働者を要求してゐるのである。

ナイロビ附近キクユ高原の開発よりも近來特に目を惹くに至つたのはウガンダの棉花栽培である。其生産物は印度棉に優るが勿論埃及棉に及ばないが恰も本邦紡績業に對し、近年其需要を生ずるに至り、現に本邦大商店員の入込み居るものがあると言ふ事で、暗黒なる阿弗利加の奥が今や將に我國と經濟的に密接な關係を結ばんとしてゐるのである。

ウガンダの棉花は其地の土人が栽培に従事し年收獲今や十萬俵に達し其賣上高は二百萬磅である。これはケニヤから出る珈琲や、シザル麻の價格を遙に超えてゐるもので、此鐵道沿線第一の物産である。ポートハミルトンよりの定期船が湖上に通ずる外に善良なる道路の開通が行渡つた、めに自働車の往復が自由で貨物の集散は極めて容易になつてきた。土人は過去二十一年間に原始状態から覺醒されてきた、當初は殺伐

であつたから征服の犠牲になつたものもあり多數は定業を營むこと不可能であつたがカピロント族の如くよく勞働するものが其間にあつて今や漸次商業的精神を得、金錢に對する必要が増加し爲めに規則的勞働の習慣が普及するに至つた。パーネス氏の報告によれば土人の能率は極めて低く白人一人の勞働力は十一人の土人の勞働力に比敵する、壯年勞働者であるならば白人一人にして土人の二十人前はやつてのけられるとの事であるが今日では土人青年の間に新思想が生じ教育熱旺盛となつてきてゐるから、漸くにして其能率も進歩するであらう。同時に二十一年間に於ける獸醫學の進歩も著しく阿弗利加の家畜が罹り易い恐るべきペストの血精療法も發見せらるゝと同時に人類に對する醫術も進歩し從來の熱帯病の病源が殆んど判明したから其治療法も功者になつてきた。かくて熱帯阿弗利加の恐怖時代は全く去つたものであつて永久居住を爲すことの可能地となつたのである。鐵道の開通と其沿線の發展に伴ひケニヤに於て歐

洲人の所有する家畜の數二十萬に垂んとし羊の數約十五萬に達する外に耕地二十五萬英町を算し一九二二年度に玉蜀黍三十五萬袋シザル麻四千六百八十餘噸珈琲二千三百七十二噸を産出するに至つたのである。最近に支線ウアシンギシユ線が殆んど完成したとの事であるから更に歐

人活動の舞臺が増加したのである。刮目すべき阿弗利加の將來に對し袖手傍觀するのみが能ではあるまい、予は英人が徐々として而かも確實にこの阿弗利加の内部に文明の環境を開拓してゆく其進軍の勇まましさに憧憬し敢てこの一文を草する。

朝鮮の奥陶紀層に關する現在の智識

中村 新太郎

朝鮮の古生層は北支那のそれと略同様であつて、其の層序を定めることが日本の秩父古生層の如く然かく困難なものでない。最近約十年間に朝鮮に在る古生層の層序は朝鮮地質調査所員并に矢部博士の盡力によつてかなり判つて來た大體の知識は確立されたと云つても可いので北支那の古生層と同様に寒武利亞紀より奥陶紀に至る石灰岩の多い一群即ち支那系（ヅキリス氏

の意義に於ける）と其の上に不整合又は整合的不整合（Disconformity）に支那系を被覆する二疊石灰紀層とがある。而して其の二疊紀層中に無焰炭層を夾んで居る。私は既に此の事を大正四年に朝鮮物産共進會出品目錄及解説書中に明記して置いた。

大體は明瞭になつたものゝ古生層殊に寒武利亞—奥陶紀層の詳細な層序學的研究の行はれた處が甚だ狭いが爲めに細部に至つては不明な點